日本中國學會報　第五十三集

玄奘の事跡にみる唐初期の佛教と國家の交渉

吉村　誠

一　序言

玄奘（六〇二―六六四）は十七年にわたるインドへの大旅行の末、中國に唯識思想の體系をもたらした人物として知られている。歸國後は唐朝の庇護の下、二十年の歳月をかけて七五部一三三五卷の佛典を翻譯し、唐室に佛教振興政策を促して中國の佛教文化を最盛期に導いた。小稿は歸國後の玄奘の事跡と帝室の動向との關わりを檢證し、唐初期における佛教受容のありかたについて考察するものである。

資料としては、まず玄奘の傳記である慧立本彦悰撰『大唐大慈恩寺三藏法師傳』（以下『慈恩傳』と略稱する）、道宣撰『續高僧傳』卷四玄奘傳、冥詳撰『大唐故三藏法師行狀』（同『行狀』）があげられる。記事内容に多少の異同があるが、これらの成立狀況を勘案して最も信用のおける記事を採用する。[1] 次に玄奘の上表文を集めたものに『寺沙門玄奘上表記』（同『上表記』）がある。『上表記』の異本である『大唐三藏玄奘法師表啓』によって、前三分の一は上奏の日付まで知ることができる。[2] さらに、玄奘の翻譯した佛典のリストと譯出年月日を記錄した『開元釋教錄』（同『開元錄』）を參照する。『開元錄』によって翻譯の進行狀況を概觀すると、玄奘の關心は瑜伽唯識・アビダルマ・般若と推移していることが窺える。[3] この流れから外れる經典の譯出には、思想的關心とは別の理由が考えられ、帝室との關連が注目される。以下、これらの資料を比較考量しつつ、玄奘と帝室の交渉を跡付けてゆきたい。

二　太宗と玄奘

1　『大唐西域記』と翻譯の勅旨

太宗（在位六二六―六四九）から歸國の勅許を得た玄奘は、貞觀十九年（六四五）正月二十五日に長安で華やかな出迎えを受け、二月一日には早くも洛陽宮で太宗に謁見している。洛陽は高句麗遠征を控えて騒然としており、太宗は兵事の時間を割いて接見した。玄奘の人柄と博識に深い感銘を受けた太宗は、「符堅が道安を得たことに勝るとも劣らぬ」と喜びを表し、時の經つのを忘れて話し込んだ。そして西域・インドの見聞を著述するよう命じ、さらには還俗して國政を補佐するよう迫った。

帝又法師の公輔の寄に堪ふるを察し、因りて歸俗して俗務を助乗するを勸む。法師謝して曰く「玄奘少くして緇門を踐み佛道に伏膺す。玄宗は是れ習ふも孔教は未だ聞かず。今俗に從はしむる

は、乗流の舟をして水を棄て陸に就かしむるに異なる無く、唯だ功無きのみならず亦た徒らに腐敗せしむるなり。願はくは身畢るまで行道し以て國恩に報ゆるを得れば、即ち玄奘の幸甚なり」と。是くのごとく固辭して乃ち止む。[4]

玄奘はこの勸めを儒教に詳しからずという理由で固辭し、終生佛者として修行することで「國恩に報」いたいと述べている。そこで太宗は高句麗遠征に陪從するよう命じたが、玄奘はこれも病身と戰鬪を見てはならないという律を理由に辭退した。それでは、佛者として一體どのように「國恩に報」いるというのか。玄奘はインドから將來した佛典を「國の爲に」翻譯したいと願い出たのであった。

法師又奏して云ふ「玄奘西域より得る所の梵本六百餘部、一言も未だ譯さず。今此の嵩岳の南少室山の北に少林寺有るを知る。堰落を遠離して泉石清閑なり。是れ後魏孝文皇帝の造る所にして、即ち菩提留支三藏の經を翻譯する處なり。玄奘望むらくは國の爲に彼に就きて翻譯せんことを。伏して勅旨を聽かん」と。帝曰く「須らく山に在るべからず。師西方に去りて後、朕穆太后を奉爲して西京に於て弘福寺を造る。寺に禪院の甚だ虛靜なる有り。法師就きて翻譯すべし」と。法師又奏して曰く「百姓無知にして玄奘の西方より來るを見て、妄りに相觀看して遂に闐闐を成す。直だ憲網に違觸するのみに非ず、亦た爲に法事を妨廢せん。望むらくは門を守るを得て以て諸の過を防がんことを」と。帝大いに悅びて曰く「師の此の意は保身の言と謂ふべし。當に處分を爲すべし。師三五日停憩して京に還り弘福に就きて安置すべし。諸有の須ふる所は一に〔房〕玄齡と共に平章せよ」と。[5]

玄奘としては故郷に近い嵩岳少林寺で靜かに翻譯に專念したいところであったが、太宗はこれを許さず母后追福のために建てた長安弘福寺で翻譯に當たらせることにした。玄奘が物見高い長安の人々に翻譯が妨げられることを懸念して守衞の配備を求めると、太宗はこれを「保身の言」であると笑って許し、必要な物があれば申し出るように言った。かくして玄奘は太宗から翻譯の勅許を得ることができた。この時、太宗は四十九歲、玄奘は四十四歲。太宗は爲政者として絶頂期にあったが、玄奘も爲政者との交渉は旅中で場數を踏んでいた。二人は互いの思惑を交差させながら妥協點を模索したのである。

太宗は玄奘を西域事情の專門家として國事のために重用するつもりであった。貞觀二十年（六四六）七月には『大唐西域記』が進獻され、太宗は「當に自ら披き覽るべし」と述べ西域進出への意欲をみせた。[6] また同年、玄奘に勅して西域・インドへの勅使に持たせる信書および『老子』を梵語に翻譯させている。[7] 一方の玄奘は、これらの要求に應えることで唐室から更なる後援を引き出そうとしていた。『上表記』によると、貞觀二十年七月十三日には「進經論等表」「進西域記表」と共に「請太宗文皇帝作經序幷題經表」が上奏されている。このことは、玄奘が『大唐西域記』の見返りとして、新譯經典に御製の序文（經序）を願い出たことを示唆している。經序の件は一旦斷られるが、玄奘は重ねて上表し、最後には勅許を得ることができた。勅許に感謝する上表文も七月十三日に出されている。この日付を信じる限り、一連の交渉は一日のうちに行なわれたことになる。こうしてみると、貞觀十九年から二十年にかけての太宗と玄奘は、互いに國事と佛事の利益を目的とした政治的交渉を重ねていたと言えるであろう。

2　大唐三藏聖教序

經序は二年後の貞觀二十二年（六四八）に完成し、「大唐三藏聖教序」（以下「聖教序」と略稱する）と名付けられた。玄奘の新譯經典は卷頭に「聖教序」を戴いて天下に頒布されたのであるが、これにはいかなる意義があったのであろうか。

太宗は貞觀十三年（六三九）にも勅して『佛遺教經』を官費で書寫し天下に頒布させているので、この場合と比較してみたい。この時の勅は「佛遺教經施行勅」と題されて『文館詞林』卷六九三や『釋氏稽古略』卷三に收錄されている。その內容は、「佛教護持を付囑された國王として僧侶の墮落は放置できないので、佛者の規範を說いた『佛遺教經』を頒布して有司に持たせ僧侶の行狀を監督させる」というものである。[8] これは佛教を護持する國王という立場を逆手にとって、その實は佛教を國法の下で管理統制するという太宗の宣言に他ならない。ことの經緯は、道士秦世英が「法琳の『辯正論』は唐室を誹謗している」と讒言し、怒り心頭に發した太宗が法琳の逮捕と共にこの勅を下した、というものであった。[9] 「佛遺教經施行勅」は佛教界の歡迎すべからざる勅だったのである。

これに對し「聖教序」の撰述は、玄奘の『瑜伽師地論』（以下『瑜伽論』と略稱する）の講義を契機として行なわれた。貞觀二十二年六月、太宗は避暑先の玉華宮に玄奘を呼び寄せた。再度還俗を勸めたものの玄奘に丁重に辭退され、話題は翻譯の話へと移っていった。玄奘は五月に『瑜伽論』百卷を譯了したことを述べると、太宗はその長大さに驚いて『瑜伽論』の概要を尋ねた。『瑜伽論』の翻譯は玄奘の宿願であり、講義にも自ずと熱が入っていたのであろう、太宗はそれを聽いていたく感心した。わざわざ長安に使者を出して『瑜伽論』を取り寄せ、精讀の後感歎し、ついに有司に勅して九州に頒布する運びとなった。

〔太宗〕嘆じて侍臣に謂ひて曰く「朕佛經を觀るに、譬へば猶ほ天を瞻（み）、海を望むがごとく、高深を測る莫し。法師能く異域に於いて是の深法を得たり。朕比ろ軍の國務殷きを以て、委しく佛教を尋ぬるに及ばず。而れども今之の宗源を觀るに、杳曠として涯際知る靡し。其の儒道九流は之に比ぶれば、猶ほ汀瀅（ていえい）の池を溟渤に方ぶるがごときのみ。而も世に三教齊致なりと云ふは此れ妄談なり」と。因りて所司に勅し祕書省の書手を簡び、新翻の經論を寫して九本と爲し、雍洛幷兗相荊楊涼益等九州に與へ、展轉流通して、率土の人をして同じく未聞の義を稟けしむ。…中略…帝先に新經序を作るを許すも、機務繁劇し未だ意を措くに及はず。此に至り法師重ねて啓するに、方に爲に翰を染め少頃して成る。大唐三藏聖教序と名づく。凡そ七百八十一字。神筆自ら寫し、勅して衆經の首を貫かしむ。帝慶福殿に居り百官侍衞す。法師に命じて坐せしめ、弘文館學士上官儀をして製する所の序を以て群寮に對し宣讀せしむ。霞煥錦舒にして褒揚の致を極む。[10]

この時、玄奘が改めて新譯經典の序文を請うと、果たして太宗は筆を取り序をしたためた。かくして二年越しの約束が果たされ、「聖教序」は完成を見たのであった。その內容は佛教と玄奘の偉業を賛美したものであり、「佛遺教經施行勅」のような政治的意圖は見られない。また、「聖教序」が百官の居竝ぶ前で宣示され、それを冠した新譯經典が天下に頒布さたということも重要である。これは太宗の佛教尊崇の態度が公に示されたことを意味しているからである。ついで皇太子も父帝に倣い「大唐三藏述聖記」（以下「述聖記」と略稱する）を著し

た。法琳の事件以來沈滯していた佛教界が、歡喜をもってこれを迎えたことは想像に難くない。

弘福寺の寺主圓定を初めとする長安の僧侶たちは「聖經序」と「述聖記」の石碑を建てることを請い、これを許可された。道宣は『續高僧傳』において「爾れより朝宰の英達、咸(みな)擊讚を申べ、釋宗の弘盛、氣接して陰(くも)を成す」[11]と記し、冥祥は『行狀』で「此れよりの後、四方の道俗手舞い足蹈み、歌詠音を連ね內外揄揚す。曾て未だ浹辰(せっしん)ならずして六合に周く、慈雲再び蔭(おほ)ひ慧日重ねて明かにして、歸依の徒波迴霧委す。所謂上の下を化するは猶ほ風の草を靡かすがごとしとは、其れ斯の謂か」[12]と喜びをあらわにしている。この文を『慈恩傳』に引用した彥悰は、さらに「如來の法を國王に付する所以は、良に此の爲なり」[13]と付け加え太宗を稱揚した。彥悰は『唐護法沙門法琳別傳』の著者であり、當人も護法僧であった。それだけに、佛教を國家の管理下に置こうとした太宗が「聖教序」を頒布して佛教尊崇を公にしたことは、特に感慨深い出來事だったのであろう。

3　太宗の佛教信仰

太宗が佛教を國家體制の下に組み入れようとしたことは否めないが、その一方で佛教思想に造詣が深く、信仰の功德による救濟を求めていたこともまた事實である。太宗は吉藏を崇敬し、辯相と夜通し佛法を論じるなど、高僧と好んで交流した。また、護國經典を賴みとし、皇后が病氣の際には長命を祈願して受戒させ、母后追福のために寺を建てるなどの崇佛行爲があったことも傳えられている。[14]

太宗の佛教信仰は晩年に至り、玄奘との交流の中で深まっていった。玄奘が玉華宮に呼ばれた貞觀二十二年（六四八）夏、太宗は高句麗遠征の失敗もあり、心身共に衰えを見せていた。隋末以來あまたの戰場を驅け巡り、權謀術數の渦中に生きた日々を追想するうちに、太宗の心はいつしか罪の意識や死への不安に苛まれるようになっていた。玄奘と佛事を談ずるうちに平安を取り戻すようになった太宗は、九月に佛教の功德について尋ねるところがあった。

帝少しく兵事を勞し、纂曆の後、又心兆庶に存す。遼東征罰に及び風霜に櫛沐し、旋旆(はい)して已來氣力頗る平昔に如かず、憂生の慮(うれ)ひ有り。既に法師に遇ひ遂に心を八正に留め、五乘を牆塹(しょうざん)して遂に將に平復に息はんとす。因りて問ふ「功德を樹ゑんと欲するに、何をか最も饒益ならん」と。法師對へて曰く「衆生惑に寢ね、慧に非ざれば啓く莫し。慧芽を抽殖するに、法は其の資たり。弘法は人に由らば、卽ち度僧を最と爲す」と。帝甚だ歡ぶ。秋九月己卯詔して曰く「昔隋季御を失ひ天下分崩す。四海塗原八挺鼎沸す。朕屬して戡亂(かんらん)に當り躬ら兵鋒を履み、丞(すすん)で風霜を犯し馬上に宿す。比ろ藥餌を加へ猶ほ未だ痊除(せん)せざるも、近日已來方に平復に就く。豈に福善の感する所ありて此の休徵を致すに非ざらんや。京城及び天下諸州の寺は宜しく各々五人を度すべし。弘福寺は宜しく五十人を度すべし」と。海內の寺を計るに三千七百一十六所、度せる僧尼を計るに一萬八千五百餘人なり。未だ此れより已前にあらず。天下の寺廟、隋季の凋殘に遭ひ緇侶將に絕えんとするも、茲の一度を蒙り竝に徒衆を成す。[15]

太宗は功德を積むには度僧が第一と聞くや、天下の諸寺に各五人、總計一萬八千五百人餘り（計算上は一萬八千六百二十五人）の僧尼を得度させる勅を發し、低迷していた佛教界はこれで一氣に勢力を盛り返すことになった。太宗は詔の中で、心身の疲勞が回復したのは「福

善」が感應したからであると述べている。ここには、病や死は現世で犯した罪の報いであり、積善功德によって罪が消滅すれば長命が得られる、という意識が働いている。すなわち大量の度僧は太宗の修善として行われたのであり、その規模の大きさは太宗の憂惱の深さを示しているのである。また、十月には玄奘に『金剛般若經』を新たに翻譯させているが[16]、これは當時『金剛般若經』が延命に利益があることで名高く、無上の功德があると信じられていたからであろう。このように考えてくると、同年八月の「聖教序」の作成や新譯經論の頒布も、唐朝の宗教政策というよりは、むしろ太宗の修善行爲としての意味合いが強いように思われる。

さて、同年十月、玄奘は太宗に陪從して長安に歸り、そのまま宮中に留め置かれた。玄奘のために紫微殿の西に弘法院が設けられ、しばらく晝は太宗と佛事を談じ夜は紫微殿で翻譯するという日々が續いた。その後、皇太子が母后のために新造した大慈恩寺の上座に任ぜられ、十二月に大慈恩寺に迎えられることになった。迎入の當日は、弘福寺から玄奘將來の經典・佛像・舍利等と、豫め準備された繡畫などの佛畫二百餘體・金銀の佛像二體・金縷綾羅の幢幡五百口が車に乘せて引き出され、それを幡蓋や錦、作り物などで莊嚴した山車千五百臺が取り圍み、大慈恩寺に向かって行進した。その後ろには大德を乘せた寶車五十臺が續き、ついで長安中の僧侶が香華を持って唄讃して從い、さらに文武百官が各々侍衛を連れてつき從った。行列の兩側を挾むようにして太常九部の樂が奏でられ、長安・萬年二縣の樂隊がその後に續き、輕業師たちが彩りを添えた。太宗は皇太子や後宮の人々を從え、安福門の樓閣で手に香爐を執って行列を見送り大いに喜んだ。見物人は街路に溢れて數え切れない。經像が大慈恩寺に着くと、長孫無忌・李勣・褚遂良ら唐朝の重臣が香爐を執って出迎え、經像等を殿内に引き入れて安置した。この盛大な佛事は太宗の勅を受けた御史大夫李乾祐によって統括されている[17]。まさに國を擧げての催事であるが、これも太宗の修善行爲の一つであった。

貞觀二十三年（六四九）四月、太宗は終南山の翠微宮に駕し、玄奘も皇太子と共に陪從した。太宗はそこで五月に崩御するまで、玄奘から因果應報や西域の話を聞きながら、最期の日々を靜かに過ごした。『開元錄』によると、玄奘はここで『甚希有經』を譯出しているが、これは造塔・造佛の功德を說く經典である。また、太宗の臨終時には『般若心經』が翻譯されているが、これは陀羅尼經典としての功德が期待されてのことであろう[18]。

こうしてみると、晚年の太宗は玄奘を政治的に利用しようという氣持ちは薄れ、むしろ高僧との交流に慰安を求めていたと言えるであろう。罪の意識や死への不安は、玄奘との對話や修善行爲を通じて慰撫されることもあったかも知れない。そして、太宗が晚年に施行した「聖教序」の頒布や大量の度僧は、結果として佛教勢力の伸張を促したのである。

三　高宗・武后と玄奘

1　高宗と大慈恩寺

貞觀二十三年七月、高宗（在位六四九―六八三）は二十二歳で帝位に就いた。『開元錄』によると、玄奘は同月に『王法正理論』を翻譯している。この書は佛陀が王者の踏むべき道について說くという內容であるから、若き皇帝の卽位を祝して進獻されたものであろう。また同月には、三歸依と持戒の功德を說く『最無比經』や、受戒の作法を

説く『菩薩戒羯磨文』と『菩薩戒本』（この二書は『瑜伽論』本地文菩薩地の一部をなす）も翻譯されている。玄奘は皇族や朝臣に受戒を請われると菩薩戒を授けたが、[19]この時は太宗の喪に際して受戒を請う者が多く出たのであろう。

明けて永徽元年（六五〇）からは、佛菩薩の功德を説く經典が翻譯されるようなった。正月に『稱贊佛土攝受經』（『阿彌陀經』の異譯）、二月から八月にかけて『說無垢稱經』（『維摩經』の異譯）、その間の五月には『藥師瑠璃光如來本願功德經』、永徽二年（六五一）正月に『受持七佛名號所生功德經』、正月から六月にかけて『大乘大集地藏十輪經』が譯されている。その一方で、貞觀年間に盛んであった唯識論書の翻譯は、殆んど手がけられなくなってしまった。

この變化は、主要な唯識經論の翻譯がほぼ終了したという事情もあるが、それ以上に帝位が太宗から高宗へと移ったことに關係があるだろう。太宗は佛教思想に深い關心を示していたが、高宗はむしろ道教の方により多くの心情を寄せていた。皇太子時代には「述聖記」や『大菩薩藏經』後序の著述、大慈恩寺の建立などの行爲がみられ、即位後も太宗の政策を繼續して佛教尊崇の態度は變わらなかった。しかし、高宗が佛教よりも道教を愛好していたことは、在位中に佛道論爭が頻繁に行なわれたことからも明らかである。顯慶三年（六五八）には三回にわたり僧侶道士を內殿に召して議論させ、同五年、龍朔三年（六六三）にも同樣の論爭を行なわせている。[20]玄奘としては、高宗が道教を尊崇するあまり崇佛政策が後退し、その影響が翻譯事業にまで及ぶようなことは何としても避けねばならなかった。ここに高宗を佛教に惹きつける必要が生じ、翻譯も難解な唯識論書ではなく、より親しみやすい功德經典等が選ばれるようになったのではないかと思われる。

しかしながら、高宗は太宗と違って佛典そのものへの關心があまり高くはなかった。そこで玄奘は方針轉換を圖り、さらに分かりやすい佛事に訴えることにした。永徽三年（六五三）大慈恩寺に巨大な石の佛塔（大雁塔）を建てることを願い出たのである。その目的は、梵本の散逸や火災を防ぐと同時に、「大國の崇基を顯はし、釋迦の故迹と爲す」[21]ことにあった。石造は年月を要するため甎造となったが、ここに基面の一邊百四十尺、相輪までの高さ百八十丈、西域風の五層の塔が建立される運びとなったのである。各層の中心には計一萬粒の佛舍利が納められ、內部には西域將來の經像が安置された。[22]また、塔の南面には右僕射褚遂良の筆になる「聖教序」と「述聖記」の石碑も建てられた。起工の日、玄奘は自ら誠願を述べる中で、大塔建立の意義を次のように說明している。

先皇、道は金輪に跨り聲は玉鼓を振はし、象季を紹隆し付屬を允膺す。又神衷を降發して親しく三藏の序を裁り、今上春宮に道を講じ復た述聖の記を爲る。光を重ね璧を合はせ彩を振るひ華を聯ね、渙汗として七耀の文を垂らし、鏗鍾として九成の奏を韻かすと謂ふべし。東都の白馬・西明の草堂より傳譯の盛んなるも、詎ぞ同日にして言ふべき者ならんや。但だ生靈運薄きを以て共に天とする所を失ふあれば、唯だ三藏の梵本零落して諸を忽せにし、二聖の天文寂寥として紀す無きを恐る。所以に此の塔を敬崇して梵本を安ずるに擬し、又豐碑を樹てて斯の序・記を鐫るなり。庶はくは永劫に巍峨し、願はくは千佛同觀して聖迹に氛氳し、二儀と固を齊しくせしめんことを。[23]

太宗を像法において佛教護持を付屬された王であると稱え、太宗の

「聖教序」と高宗の「述聖記」を稱揚して、梵本と二碑とが永遠ならんことを祈願する内容である。すなわち、玄奘は梵本の保存という目的もさることながら、大塔が唐室の佛教尊崇の記念碑となることを企圖していたのである。しかも、大慈恩寺のある進晶房は大明宮の南正面に位置しているため、天子南面すれば大塔は必ず視界の中央に聳え立つことになる。大塔は唐の崇佛を象徴すると同時に、唐室に崇佛の念を忘れさせない役目も果たしていたようである。さらに、顯慶元年（六五六）正月、玄奘は黄門侍郎薛元超と中書侍郎李義符を通じて、大慈恩寺に新たな御製碑を建立することを願い出た。建立の意義については、高宗が母后追福のために大慈恩寺を建てたということを後世に傳えるため、と説明されている。[24] 同年三月に碑文が完成すると、玄奘はそれを宸筆で刻むことを請うて上奏した。高宗は飛白の書を得意としていたので、あえて自書を願い出たのである。この件は一旦斷られるが、重ねて上奏し許しを得ている。宸筆の御製碑が完成すると、貞觀二十二年のように盛大な法事が擧行され、御製碑は九部の樂が鳴り響くなか華やかに大慈恩寺に迎え入れられた。

玄奘は巨大な佛塔や宸筆の御製碑を建立することで、大慈恩寺を高宗崇佛のシンボルとし、唐室の佛教尊崇を内外に宣揚しようとしたのである。

2　永徽六年の空白

顯慶元年（六五六）正月、玄奘は御製碑の建立と共に、朝臣による翻譯の監閲も願い出ている。監閲は歴代の翻譯事業でも行なわれているが、玄奘の場合は自ら求めて國家の管理を受けようというもので、おそらくは事業繼續の保證を目的とするものであった。しかし、高宗の崇道という問題があったにせよ、何故この時期に翻譯事業の足場固めが必要だったのであろうか。『開元錄』で翻譯の進行狀況を見てみると、永徽五年（六五四）七月から顯慶元年七月まで、翻譯事業が殆んど休止していることが注意される。玄奘の譯場では常に大部の經典が繼續して翻譯されていたが、この期間には短い經典が八部、散發的に翻譯されているのみで、永徽六年（六五五）に至っては一部の經典も翻譯されなかった。このような例は他になく、特異な時期であると言わざるを得ない。そこで次に、この間に玄奘が抱えていた問題について推測してみることにしたい。

第一に、病氣のことが考えられる。玄奘は旅行中に得た病氣のために、顯慶元年五月と同二年十一月に危篤の狀態に陥っている。[25] また、永徽五年九月から十月にかけて『拔濟苦難陀羅尼經』『八名普密陀羅尼經』『勝幢臂印陀羅尼經』『持世陀羅尼經』などの陀羅尼經典が集中的に翻譯されていることも注意される。陀羅尼經典は太宗臨終の際の『般若心經』のように、病氣平癒を祈願して譯出されることがあるからである。翻譯事業は一般に譯場主の三藏が亡くなると停止されてしまう。玄奘が沒した時もすぐに翻譯停止の勅が下され、翻譯僧は各自もとの寺に戻されている。[26] もし永徽の末に玄奘が病氣であったとすれば、體調不良を理由に翻譯が停止されることを恐れて監閲を申し出たということも考えられる。しかし、玄奘の傳記にはこの期間に病氣の記錄はない。そればかりか永徽六年前後には殆んど何の活動も記錄されていないのである。そうすると、玄奘は傳記の著者である翻譯僧たちの目の届かない所にいたという可能性が出てこよう。

そこで第二に、宮中の動向が注目される。永徽の末は、宮中が武照（後の則天武后。在位六八四―七〇五）の立后をめぐって大きく揺れてい

た時期である。武氏は永徽五年から皇后の座を奪取すべく畫策し、永徽六年十月ついに皇后位に就くことになった[27]。時に高宗二十八歳、武后三十三歳であった。宮中で武氏立后をめぐる權力闘爭が續くなか、玄奘は武氏に積極的に接近していったようである。そのことは以後の兩者の關係から推定されるのであるが、兩者の接近はこの時期に翻譯された經典の內容からも窺うことができる。『開元錄』によると、永徽五年閏五月には未來における彌勒の出現を豫言する『大阿羅漢難提蜜多羅法住記』、六月には佛陀が女性の姿をした德華嚴菩薩に功德を說く『稱贊大乘功德經』、九月には佛國土の功德を說く『顯無邊佛土功德經』が翻譯されている。玄奘がこれらを翻譯する理由は、思想的にも翻譯の進行狀況からいっても見當たらない。むしろ、後に武后が彌勒下生と佛國土の建設に擬して帝位に就いたことを考えると、これらが武后のために翻譯されたということの方が疑われよう。永徽五年の陀羅尼經典の翻譯も、神祕的な雰圍氣を好む武后に向けられたものということも考えられる。

永徽六年前後に翻譯事業が休止されたのは、おそらく玄奘が宮中の政治に深く關與していたためであろう。玄奘は新たに臺頭してきた武氏勢力との接近を畫策したが、この時は未だ情勢が流動的であった。このような狀況を考えると、顯慶元年に翻譯事業の監閲を願い出たのは、武氏立后をめぐる不安定な政治情勢をにらんで、改めて翻譯事業繼續の保證を得ようとしたものではないかと推察される。

3　武后と佛光王

ともあれ、顯慶年間以降の武后と玄奘の關係は、上記のように推測させるに足るものがある。まず、顯慶元年（六五六）五月以降の上表文では、それまで「皇帝陛下」であった所が「皇帝皇后」となり、高宗と武后が併稱されるようになった。また、同年十月から十二月には武后の出產に關する上表文が大量に出されており、玄奘と武后の間に密接な關係があったことを物語っている。

顯慶元年十月、出產に苦しむ武后は玄奘を呼び、三寶に歸依して加持を求めた。玄奘は武后の身を安んじて男子の出生を豫言し、その出家を願い出て勅許された。皇子の出家が許されたのは、高宗と武后の間には既に皇太子の李弘や李賢がいたからであろう。十一月、玄奘は赤雀が御帳に飛來したのを吉祥であると上表すると、果たして武后は男子を出產した。これが李哲（後の中宗）である。李哲は「佛光王」と號され、勅により玄奘の護念するところとなった。玄奘は佛光王に戒を授け、法服を着せて常に身近に養育した。滿三日を祝う上表文のなかで、玄奘は改めて皇子の出家を勸め、次のように述べている。

玄奘に在りては、特に百の恒情あり。豈に直に聖后の平安を喜ぶのみならんや、實に亦た如來の嗣有るを欣ぶ。伏して願はくは前勅と違はず、卽ち出家を聽さんことを。人王の胤より移り法王の子となり、法服を披着して法名を征立し、授くるに三歸を以て僧數に列し、像化を紹隆して玄風を闡播し、再び禪林に秀で重ねて覺苑に暉き、淨眼の茂跡を追ひ月蓋の高蹤を踐み、二種の纏を斷じて無等覺を成じ、色身微妙なること彼の山王に譬へ、焰網莊嚴なること日月に過ぐ。然る後、慈雲を大千の境に蔭し、慧炬を百億の洲に揚げ、法鼓を振り天魔を挫き、勝幡を麾きて外道を摧き、沈流を倒海に接し、燎火を邪山に撲ち、煩惱の深河を竭くし、無明の巨殼を碎き、天人の師と爲り調御の士と作らん。唯だ願はくは先廟先靈、孫祉に藉りて彼岸に昇り、皇帝皇后、子福に因りて

萬春を享け、永く靈圖を握り常に九域に臨まんことを。子の能く此くのごとくんば、方に大孝と名付け、始めて榮親と曰はん。釋迦の國を棄て菩提に務むる所以は、蓋し此れが爲なり。豈に東平の瑣瑣の善、陳思の庸庸の才を以て、日に竝べて優劣を論じ、年を同じくして深淺を議するを得んや。[28]

玄奘は佛光王を王族に生まれながら出家した釋尊に擬え、まさに如來の後繼ぎであると贊嘆し、ゆくゆくは最高の覺りを開くであろうと壽いでいる。また、佛光王の出家得度の功德は先祖を彼岸に渡し、皇帝皇后に長壽をもたらして天下に君臨させる。これこそ「大孝」と言うべきもので、釋尊が國を捨て覺りを求めた理由である、と述べている。これは、出家得度は孝の倫理や先祖祭祀に悖るものではなく、むしろ最大の孝であるという主張である。これを受けて高宗は十二月、佛光王が滿一月になると玄奘に剃髮させ、皇子のために七人の僧を度したのであった。そもそも武后の母は敬虔な佛教信者であり、武后自身も佛教への關心は高かった。玄奘は佛教に親しい武后の皇子を出家させることで、やがて佛教が唐室に浸透し、ひいては佛教が厚く庇護されるよう期待していたのであろう。

顯慶四年（六五九）武后勢力がほぼ實權を掌握するようになると、玄奘は翻譯に專念することを願い出て玉華寺（元玉華宮）へ退いた。顯慶五年（六六〇）には武后執權、所謂「垂簾の政」が始まったが、既に武后と繫がりのある玄奘は、後顧の憂いなく『大般若經』の翻譯に集中できたはずである。こうしてみると、玄奘は新たに臺頭した武氏の勢力に進んで近づくことで、翻譯事業を最後まで全うすることができたと言えるであろう。一方の武后も、佛教と國家の關係について玄奘に學ぶところがあったのではなかろうか。

四　唐の宗教政策と玄奘

1　佛道名位次第

唐室は老子と李姓を同じくするところから、道教を儒教・佛教と區別して特別な待遇をした。佛教に對しては表向き寛容な姿勢が取られたが、高祖の時に傅奕の活動もあって佛教沙汰の動きがあった。太宗の時には道士女冠を僧尼の前とする所謂「道先佛後」の勅が下され、法琳の事件を契機に國家による僧尼の統制も一層嚴しいものになっていた。時に大規模な法會が催されることもあったが、それも帝威宣揚の域を出るものではなく、貞觀年間以前の佛教は概して振っているとは言い難い狀況にあった。[29]ところが、玄奘が歸國して以來、太宗・高宗はその勸めに從って造寺・造佛・度僧・法會を積極的に行なうようになり、次の武周に至り崇佛政策は頂點に達した。當時の佛教界にとって玄奘の活躍は一大慶事であり、それなくしては唐の佛教文化の隆盛もありえなかったであろう。具體例はこれまでの敍述に讓るが、唐初期の崇佛政策の多くが玄奘によって引き出されたことは注目すべき事實である。

玄奘は帝室の關心を佛教に引きつける一方で、「佛道名位次第」や「僧尼に對する法令」の停止を働きかけていた。『慈恩傳』に次のような記事がある。貞觀十一年（六三七）に「老子は是れ朕の祖宗なれば、名位稱號は宜しく佛の先に在るべし」という勅が下された。玄奘は歸國以來この勅の停止を求めて頻りに內奏したが、太宗は商量を約したまま崩御してしまった。また、永徽六年（六五五）には道士僧尼の罪を俗法によって處罰する法令が發せられ、微罪に至るまで俗法による刑罰が科せられるようになった。玄奘は日頃からこの二つの問題につ

いて憂慮していた。そのような中、顯慶元年（六五六）五月、玄奘は高熱で倒れ、「幾んど將に濟はれざらんとす」という危篤の狀態に陥った。宮中からは醫師と藥が遣わされ、見舞いの勅使が一日に何度も往復した。晝夜を問わぬ看護の末、五日目にして病が快方に向かうと、内外にようやく安堵の空氣が流れた。玄奘は病床より上奏して高宗の見舞いに感謝を述べると共に、最期の願いとして「佛道名位次第」と「僧尼を俗法で處罰する法令」の停止を願い出たのであった。

法師每に之を憂へ、疾の委頓なるに因り更に天顏を見ざるを慮り、乃ち人に附して前の二事の國に於て便に非ざるを陳ぶ。「玄奘の命旦夕に垂んとす。恐らくは後言するを獲ず。謹みて啓を附して聞す。伏枕して惶懼す」と。勅して報ぜしめて云ふ「陳ぶる所の事之を聞く。但し佛道名位は先朝の處分なれば、事は平章を須ひん。其の俗と同じくする勅は卽ち停廢せしむ。師宜く意を安んじ强ひて湯藥を進むべし」と。二十三日に至り勅降りて曰く「道敎は淸虛にして、釋典は微妙なり。庶物は其の津梁を藉り、三界の遵仰する所なり。比ろ法末人澆と爲りて多く制律に違ひ、權りに俗法に依りて以て懲誡を申ぶるあり。冀ひは惡を止め善を勸むるに在りて、非とするは是れ人を以て法を輕んずることなり。但だ出家人等は具さに制條有らば、更に別に科を推すは恐らくは勞擾爲らん。前に道士女道士僧尼の犯有るを俗法に依らしむるは宜しく停むべし。必ず違犯有らば宜しく條制に依るべし」と。[30]

結局、「佛道名位次第」の廢止は先朝の決定であるという理由で認められず、「僧尼を俗法で處罰する法令」だけが停止されることとなった。後者が認められたのは、道僧格という道士僧尼に對する法令が別に存在していたからであろう。引用文中の「制條（條制）」は道僧格を指すものであり、永徽六年の法令が停止されたとしても、敎團の內律に任せるという意味ではなかった。一方、「佛道名位次第」の停止は、玄奘の末期の願いとあっても聞き屆けられなかった。玄奘の沒後、武周の天授二年（六九一）に僧尼が道士女冠の上とされ[31]、武則天の一代は「佛先道後」となった。晚年の玄奘は佛敎の振興を武后に託していたが、玄奘が停止を求め續けた「佛道名位次第」は、圖らずも武后の手でその順序が覆されたのであった。

2　僧尼拜君親

次に唐初期における僧尼の禮敬問題について見ることにしたい。僧尼の拜親については、太宗の貞觀五年（六三一）に勅して僧尼は父母を敬すべしとされたが、おそらくは佛敎徒の反對があったのであろう、同七年には停止の勅が下されている。高宗の顯慶二年（六五七）二月には、僧尼の父母がわが子を禮拜することを停止すべしという勅が下されたが、これにはさしたる反對も起こらなかった。これによると、當時は僧尼が父母を拜さないばかりか、僧尼が父母から拜されることが普通に行なわれていたようである。[32]

この勅の出された顯慶二年二月、高宗は洛陽に駕し、玄奘も佛光王と共に陪從した。秋立つ頃、玄奘は少しく暇を請い、洛陽郊外の故鄕に四十數年ぶりの里歸りを果たした。親戚や友人は既になかったが、姉の嫁ぎ先を知ることができ、ついに再會して懷古の情を共にした。姉から兩親の墓所を聞いて訪ねてみると、墓はひどく荒廢していたので、玄奘は自ら掃除をして父母に拜禮した。戰亂の相次ぐ隋末唐初に亡くなり、十分な葬儀ができなかったのであろう、それは粗末な墓であった。玄奘は父母の墓を改葬すべく、許された日程の延長を願い出

た。

沙門玄奘言す。玄奘不天にして夙に荼蓼を鍾め、兼ねて復た時は隋亂に逢ひ、殯掩倉卒にして日月居らず。已に四十餘載を經て、墳壟頽毀し殆んど將に滅夷せんとし、平昔を追惟して情自ら寧からず。謹みて老姉と二人遺柩を收捧し、彼の狹陋を去りて西原に改葬し、用て昊天に答へ微かに罔極を申べんとす。昨日勅を蒙り玄奘を放ち、三兩日の檢校に出さしむ。但だ玄奘更に兄弟無く、唯だ老姉と二人卜遠して期有り、此月二十一日を用て安厝す。今葬事を觀るに尚ほ寥落にして未だ辦ぜず、賜ふ所の三兩日に恐らくは周匝せざらん。望むらくは天恩を乞ひ、玄奘の葬事了りて還るを聽さんことを。又婆羅門の上客今相隨逐するに、過りて率略を爲し嗤笑を將くるを恐る。纏迫憂慴の至りに任へず。謹みて表を附し以て聞す。伏して乞ふらくは天覆ひ雲迴り、曲げて孤請を憐れまんことを。[33]

高宗はこの願いを聞き入れ、日程の延長を許可したばかりでなく、改葬費用を官費から支給するよう有司に命じた。改葬の威儀はすべて帝室によって整えられ、洛陽の道俗でそれを參觀したものは萬餘人に上ったという。

この話は僧尼の拜親問題と直接の關係はない。しかし、父母の墓を改葬して拜禮する玄奘の姿は、唐室や參觀者の眼に望ましい僧侶の姿として映ったことであろう。玄奘は多くの漢人僧と同じように、儒教倫理である孝は佛教に矛盾しないと考えていた。顯慶元年（六五六）十二月、玄奘は佛光王に金字の『般若心經』と『報恩經變』を獻じているが、[34]後者は父母への孝養を說く『大方便佛報恩經』の變文である。玄奘はまた、先述の佛光王の滿三日を祝う上奏文で見たように、出家得度は儒教倫理や祖先祭祀に違反するものではなく、むしろ「大孝」であるという考えを持っていた。これも儒教の立場から出家の不孝を非難された時に佛教徒が唱える常套的な論理であった。[35]

一方、玄奘の拜君に對する姿勢は詳らかではないが、上表文の中で「臣」と自稱することはなかったので、不拜の立場を取っていたのであろう。ところが、玄奘が玉華寺に退いた後の長安では、拜君親問題をめぐって大論爭が起こっている。龍朔二年（六六二）四月、僧道に君親を拜させるべきか否かを、有司に議論させるという勅が發せられた。『全唐文』卷一四によると、拜すべき對象には皇后と皇太子も含まれているので、おそらくは武后の意を反映した勅であったのだろう。これには佛教側から猛烈な反對運動がおこり、二百人の僧侶が蓬萊宮（元大明宮）に押しかける騷動となった。道宣・威秀・彥悰らが反對の上奏をした結果、百官に諮ることになったが贊否兩論で決せず、六月になって拜君は取り下げられ親のみ拜すべしという勅が下された。これにも異議が出たというが結末は明らかではない。玄宗の開元二年（七一四）には再び拜親の勅が出されているので、おそらくは停止に追い込まれたのであろう。[36]

反對運動の中心にいた道宣と彥悰は、共に玄奘の翻譯事業に携わった人物であり、彼らの屬する西明寺と弘福寺は玄奘が上座を務めた寺であった。玄奘の周りには、拜君親や道先佛後に批判的な護法僧が大勢いたのである。また、道宣と彥悰は玄奘傳の作者でもあり、共に玄奘の護法行爲を記錄している。先述の玄奘が帝室に「佛道名位次第」等の停止を求めたという記事を書いたのは彥悰であるが、そこに描かれた玄奘の言動はまさに護法僧のそれである。[37]玄奘は激しい抗議行動に訴えることこそなかったが、彥悰たち護法僧からは、帝室に直接働

きかけをする特別の存在、別格の護法僧と見做されていたようである。そうすると、龍朔二年の拜君親問題がこじれた一因には、帝室と佛教界の間に立っていた玄奘が退き、高宗・武后と護法僧の雙方を抑える者が不在になったということも考えられるであろう。玄奘は唐の宗教政策に提言を續けることで帝室と佛教界を共に牽制し、兩者の衝突を緩和する役割を果たしていたものと思われる。

五　結　語

これまで見てきたように、玄奘と唐朝の交渉はたんに佛典の翻譯事業にとどまらず、唐初期における宗教政策の全般にわたるものであった。玄奘は帝室と積極的な交渉を持つことで唐初期の佛教政策の轉換を促し、道教の下位に置かれていた佛教を隆盛に導いた。太宗・高宗・武后の崇佛は三者三様であったが、玄奘はそれぞれの興味や關心に應え、時には宮廷政治にも進んで關わりながら、多様な佛教振興政策を引き出し續けたのである。

ただし、小稿は歸國後の玄奘の一面を敍述したにすぎない。玄奘は中國隨一の唯識學者であり、歷代で最多の佛典を翻譯した譯經三藏である。玄奘の本領はそこにこそ求められるべきであろう。そもそも玄奘がインドへ旅した目的は、『瑜伽論』を將來して唯識佛教の體系を中國に傳えることにあった。これを迎えた太宗は、玄奘を國事に利用する一面もあったが佛教思想に理解があり、翻譯事業を後援しながらその內容は玄奘の裁量に任せていた。そのため、玄奘は主要な唯識經論の殆どを太宗の貞觀年間に翻譯することができたのである。後半生を翻譯に捧げる覺悟で歸國した玄奘にとって、太宗の處置は概ね理想的であったと言えるだろう。

玄奘は太宗に佛教と國家の關係について、「法藏は沖奧にして通演すること實に難し。然らば則ち內闈住持は釋種に由り、外護建立は帝王に屬在す。…中略…勝緣に附託すれば方に能く廣く益す」[38]と述べている。佛教が廣まるには、佛者がその內容を明らかにし、帝王がそれを外護しなければならない、という主張である。その考えが端的に現れている話がある。

顯慶二年（六五七）春、玄奘が『發智論』二十卷とその注釋書『大毘婆沙論』を突き合わせて翻譯を進めていると、高宗から未だ漢譯の無いものを先にし、既に漢譯があるものは後回しにせよとの勅が下った。確かに『發智論』は『八犍度論』の重譯であり、『大毘婆沙論』も一部が既に翻譯されていた。しかし、舊譯のアビダルマ文獻は部分的なものにすぎず、傳來や譯者によって用語が不統一で、後學のためにもその整備は不可缺であった。玄奘は上表した。

去る月日勅を奉ず、翻ずる所の經論は、此に無き者在らば宜く先に翻じ、舊に有る者は後に在りて翻ぜよと。但だ發智・毘婆沙論は二百卷有るも、此の土先には唯だ半有るのみ。但だ百餘卷有るも、文に舛雜多し。今更に整頓して之を翻ず。去る秋以來已に翻じて七十餘卷を得たるも、尙ほ百三十卷の未だ翻ぜざる有り。此の論は學者に於て甚だ要なり。望むらくは翻了を聽さんことを。餘の經論の詳略不同及び尤も舛誤有る者も、亦た望むらくは隨ひ翻じて以て聖述に副はん。[39]

上表文としては異例の文飾を抑えた筆致で『大毘婆沙論』翻譯の必要性を述べ、今後も舊譯が不十分なものであれば重譯を許可するよう願い出て、一歩も讓っていない。玄奘の嚴乎たる態度に、高宗はこれを許すしかなかった。帝室による佛教の庇護を受けながら、その中身

については佛者の裁量に委ねられている。これが、玄奘が唐室に期待した佛教と國家の關係だったのである。

しかし、道教を愛好する高宗が即位し、武后が臺頭して政局が混迷する中で、崇佛政策の存續自體が危ぶまれるようになると、玄奘は帝室との交渉に積極的に乗り出すようになっていった。翻譯の停滯は餘儀なくされたが、唐の宗教政策が帝室の意向によって左右される以上、それは翻譯事業の繼續のためにも必要なことであった。また、唐室と密接な關わりを持つうちに自分にしかできない役割が自覺されたのであろう、玄奘は佛道名位次第や僧尼への俗法適用の停止などを內奏し續け、帝室と佛教界の對立の緩衝に努めていた。玄奘が退いた後の長安で僧尼の拜君親問題が紛糾したことは、玄奘が國家と佛教の間にあって楔石の役割を果たしていたことを示すものであろう。

注

(1) 『慈恩傳』『續高僧傳』『行狀』は『大正新脩大藏經』(以下「大正」と略稱する) 第五〇卷所收。玄奘傳の成立については、拙稿「『大唐大慈恩寺三藏法師傳』の成立について」(『佛教學』三七、一九九五年) 參照。

(2) 『上表記』大正五二、八一八a—八二六c。麟德元年 (六六四) から弘道元年 (六八三) に成立。上表文の草稿か寫本を集めたものであろう。上表文は『慈恩傳』にも收錄されているが異同があり、『上表記』未收のものも收錄している。

(3) 『開元錄』大正五五、五五五b—五五七b。開元十八年 (七三〇) 成立。翻譯の進行狀況については、拙稿「玄奘の大乘觀と三轉法輪說」(『東洋の思想と宗教』一六、一九九九年) 參照。

(4) 「帝又察法師堪公輔之寄、因勸歸俗助秉俗務。法師謝曰、玄奘少踐緇門伏膺佛道。玄宗是習孔教未聞。今遣從俗、無異乘流之舟使棄水而就陸、不唯無功亦徒令腐敗也。願得畢身行道以報國恩、卽玄奘之幸甚。如是固辭乃止。」『慈恩傳』大正五〇、二五三b。

(5) 「法師又奏云、玄奘從西域所得梵本六百餘部、一言未譯。今知此嵩岳之南少室山北有少林寺。遠離壓落泉石淸閑。是後魏孝文皇帝所造、卽菩提留支三藏翻譯經處。玄奘望爲國就彼翻譯。伏聽勅旨。帝曰、不須在山。師西方去後、朕奉爲穆太后於西京造弘福寺。寺有禪院甚虛靜。法師可就翻譯。法師又奏曰、百姓無知見玄奘從西方來、妄相觀看遂成闐闠。非直違觸憲網、亦爲妨廢法事。望得守門以防諸過。帝大悅曰、師此意可謂保身之言也。當爲處分。師可三五日停憩還京就弘福安置。諸有所須一共玄齡平章。」『慈恩傳』大正五〇、二五三c。

(6) 『慈恩傳』大正五〇、二五四c。

(7) 『續高僧傳』大正五〇、四五五b—c。

(8) 『釋氏稽古略』大正四九、八一五c。

(9) 『遺教經』の頒布については、滋野井恬「唐貞觀中の遺教經施行について」(『印度學佛教學研究』二六—一、一九七七年)、礪波護「唐初の佛教・道教と國家—法琳の事跡にみる—」(『中國古道教史研究』同朋舍出版、一九九二年) 參照。

(10) 「嘆謂侍臣曰、朕觀佛經、譬猶瞻天望海、莫測高深。法師能於異域得是深法。朕比以軍國務殷、不及委尋佛教。而今觀之宗源、杳曠靡知涯際。其儒道九流比之、猶汀瀅之池方溟渤耳。而世云三教齊致此妄談也。因勅所司簡祕書省書手、寫新翻經論爲九本、與雍洛幷兗相荊楊涼益等九州、展轉流通、使率土之人同稟未聞之義。…中略…帝先許作新經序、機務繁劇未及措意。至此法師重啓、方爲染翰少頃而成。名大唐三藏聖教序。凡七百八十一字。神筆自寫、勅貫衆經之首。帝居慶福殿百官侍衞。命法師坐、使弘文舘學士上官儀以所製序對群寮宣讀。霞煥錦舒極褒揚之致。」大正五〇、二五六a—b。

(11) 『續高僧傳』大正五〇、四五六c。
(12) 『行狀』大正五〇、二一八b。
(13) 『慈恩傳』大正五〇、二五七c。
(14) 太宗の佛教信仰については、滋野井恬「唐の太宗李世民と佛教」(佛教史學會編『佛教の歴史と文化』所收、同朋舍出版、一九八〇年)、諸戸立雄「唐太宗の佛教信仰について」(『中國佛教制度史の研究』平河出版社、一九九〇年)參照。
(15) 「帝少勞兵事、纂曆之後、又心存兆庶。及遼東征罰櫛沐風霜、旋旆已來氣力頗不如平昔、有憂生之慮。既遇法師遂留心八正、牆塹五乘遂將息平復。因問、欲樹功德、何最饒益。法師對曰、衆生寢惑、非慧莫啓。慧芽抽殖、法爲其資。弘法由人、卽度僧爲最。帝甚歡。秋九月己卯詔曰、昔隋季失御天下分崩。四海塗原八挺鼎沸。朕屬當戡亂躬履兵鋒、丞犯風霜宿於馬上。比加藥餌猶未痊除、近日已來方就平復。豈非福善所感而致此休徵耶。京城及天下諸州寺宜各度五人。弘福寺宜度五十人。計海內寺三千七百一十六所、計度僧尼一萬八千五百餘人。未此已前。天下寺廟、遭隋季凋殘緇侶將絶、蒙茲一度竝成徒衆。」(大正五〇、二五八c—二五九a)
(16) 『慈恩傳』大正五〇、二五九a。
(17) 『慈恩傳』大正五〇、二五九b—c。
(18) 陀羅尼經典としての『般若心經』については、福井文雅『般若心經の總合的研究』(春秋社、二〇〇〇年)參照。
(19) 『慈恩傳』大正五〇、二六〇b—c、二六六b—c。
(20) 佛道論爭については、久保田量遠「唐代に於ける佛道二教の抗爭」(『支那儒佛道三教史論』東方書院、一九三一年)參照。
(21) 『慈恩傳』大正五〇、二六〇c。
(22) 大雁塔の周圍からは多數の塼佛が出土しているが、これは修善功德のために大雁塔に奉獻されたものと思われる。肥田路美「唐蘇常待所造の「印度佛像」塼佛について」(『美術史研究』二二、一九八五年)、荻原哉「玄奘發願「十俱胝像」考—「善業泥」塼佛をめぐって—」(『佛教藝術』掲載予定)參照。
(23) 「先皇、道跨金輪聲振玉鼓、紹隆象季允膺付屬。又降發神衷親裁三藏之序。今上春宮講道復爲述聖之記。可謂重光合璧振彩聯華、渙汗垂七耀之文、鏗鏘韻九成之奏。自東都白馬西明草堂傳譯之盛、詎可同日而言者也。但以生靈薄運共失所天、唯恐三藏梵本零落忽諸、二聖天文寂寥無紀。所以敬崇此塔擬安梵本、又樹豐碑鐫斯序記。庶使巍峨永劫、願千佛同觀氛氳聖迹、與二儀齊固。」『慈恩傳』大正五〇、二六一a。
(24) 『慈恩傳』大正五〇、二六六a—b。
(25) 『慈恩傳』大正五〇、二六九c—二七〇c、二七四c—二七五a。
(26) 『慈恩傳』大正五〇、二七八a。
(27) 武后の事跡については、氣賀澤保規『則天武后』(白帝社、一九九五)參照。
(28) 「在於玄奘特百恒情。豈直喜聖后之平安、實亦欣如來之有嗣。伏願不違前勅、卽聽出家。移人王之胤、爲法王之子。披著法服制立法名、授以三歸列於僧數、紹隆像化闡播玄風、再秀禪林重暉覺苑、追淨眼之茂跡踐月蓋之高蹤、斷二種繼成無等覺、色身微妙譬彼山王、焰網莊嚴過於日月。然後、蔭慈雲於大千之境、揚慧炬於百億之洲、振法鼓而挫天魔、磨勝幡而摧外道、援沈流於倒海、撲燎火於邪山、竭煩惱之深河、碎無明之巨殼、爲天人師作調御士。唯願先廟先靈、藉孫祉而昇彼岸、皇帝皇后、因子福而享萬春、永握靈圖常臨九域。子能如此、方名大孝、始曰榮親。所以釋迦棄國而務菩提、蓋爲此也。豈得以東平瑣瑣之善、陳思庸庸之才、竝日而論優劣、同年而議深淺矣。」『慈恩傳』大正五〇、二七一c—二七二a。
(29) 唐初期の宗教政策については、久保田、滋野井、諸戸、礪波各氏の前掲論文參照。

(30) 「法師每憂之、因疾委頓慮更不見天顏、乃附人陳前二事於國非便。玄奘命垂旦夕。恐不獲後言。謹附啓聞。伏枕惶懼。勅遣報云、所陳之事聞之。但佛道名位先朝處分、事須平章。其同俗勅卽遣停癈。師宜安意强進湯藥。至二十三日降勅曰、道敎淸虛、釋典微妙。庶物藉其津梁、三界之所遵仰。比爲法末人澆多違制律、權依俗法以申懲誡。冀在止惡勸善、非是以人輕法。但出家人等具有制條、更別推科恐爲勞擾。前令道士女道士僧尼有犯依俗法者宜停。必有違犯宜依條制。」『慈恩傳』大正五〇、二七〇a—b。

(31) 『舊唐書』巻六、則天皇后本紀。

(32) 唐代の禮敬問題については、道端良秀『唐代佛敎史の研究』(法藏館、一九五七年)、藤善眞澄「唐中期佛敎史序說—僧尼拜君親を中心に—」(『南都佛敎』二二、一九六九年)、礪波護「唐代における僧尼拜君親の斷行と撤回」(『東洋史研究』四〇—二、一九八一年)參照。

(33) 「沙門玄奘言。玄奘不天夙鍾荼蓼、兼復時逢隋亂、殯掩倉卒日月不居。已經四十餘載、墳壟頹毀殆將滅夷、追惟平昔情不自寧。謹與老姉二人收捧遺柩、去彼狹陋改葬西原、用答昊天微申罔極。昨日蒙勅放玄奘、出三兩日檢校。但玄奘更無兄弟、唯老姉二人卜遠有期、用此月二十一日安厝。今覩葬事尙寥落未辦、所賜三兩日恐不周匝。望乞天恩、聽玄奘葬事了還。又婆羅門上客今相隨逐、過爲率略恐將嗤笑。不任纏迫憂慴之至。謹附表以聞。伏乞天覆雲迴、曲憐孤請。」『慈恩傳』大正五〇、二七三a。

(34) 『慈恩傳』大正五〇、二七二b。

(35) 大孝の觀念については、道端良秀『佛敎と儒敎倫理』(平樂寺書店、一九六八年)參照。

(36) 註(32)の前揭論文參照。

(37) 彥悰の描き出そうとした玄奘像については、拙稿「『慈恩傳』に現れたる玄奘像(續)—彥悰撰述部分を中心に—」(『早稻田大學高等學院研究年誌』、一九九七年)參照。

(38) 『慈恩傳』大正五〇、二六六a。

(39) 「去月日奉勅、所翻經論、在此無者宜先翻、舊有者在後翻。但發智毘婆沙論有二百卷、此土先唯有半。但有百餘卷、而文多舛雜。今更整頓翻之。去秋以來已翻得七十餘卷、尙有百三十卷未翻。此論於學者甚要。望聽翻了。餘經論有詳略不同及尤舛誤者、亦望隨翻以副聖述。」『慈恩傳』大正五〇、二七二c—二七三a。